

事項2 満州国の成立と日本の承認

ミナラス拳世ノ禍福之ニ倚頼スル所アラム
査スルニ貴国ノ東北強佔ノ拳ハ其ノ藉口スル所左記數項ニ
外ナラス

一、日本ハ島国ニシテ物資足ラス故ニ満州大陸ニ倚リ生命
ノ源泉ヲ得ムトス
二、日本ハ人口激増シ別ニ植民地ヲ求ムルノ要アリ世界中
満州ノ外適地ナシ

三、日露ノ役日本ハ全力ヲ竭シテ満州ヲ強露ノ手ヨリ救ヘ
リ故ニ在滿ノ特權ハ露人ノ手ヨリ得タルモノナリ、然ル
ニ今ヤ中国ハ其ノ他ノ租借地ト同様一律之ヲ回收セムト
スルヲ以テ之ト争ハサルヲ得ス

四、東亞ノ和平ヲ保全シ蘇俄ノ東侵ヲ免レンカガニハ勢大
陸ニ立脚シ能ク其ノ武力ヲ展ヘ以テ赤露ヲ制セサルヲ得ス
以上數項ハ日本人持スル所ノ理由ナリ請フ今一々之ヲ弁セ
ン

一、満州ニシテ果シテ日本ノ生命線ナリトセハ宜シク先ツ
双方ノ好感ヲ保全シ親善ヲ実行セサル可カラス日本ノ求
ムル所ハ物資ト營業ノ利益トニ在リ今ヤ得ル所ノ權利少
カラス又之ヲ侵スモノ無キニ何ソ土地ヲ併吞シ之ニ割拠

使節ニ依リ解決ノ途アリ何ソ武力ニ訴フルノ要アラムヤ
且ツ日本先ツ連盟及九国ノ公約ヲ破壊ス、安ソソ中国ノ
守約ヲ責メ得ンヤ、今ノ如クンハ兩國人民ノ交誼永ク絶
ヘ又自ラ孤立ニ陥ルコト昔者「ウイルヘルム」ノ第二ノ
轍ヲ踏マンコトヲ恐ル中国人本仇日ノ觀念ナシ日本人自
ラ之ヲ造成シ好箇ノ大市場ヲ人ニ委セントシツツアリ得
失自ラ明ナルヘシ語ニ云フ三戸猶秦ヲ亡ホスト、貴国今
日ノ事勝ツト雖敗ルルカ如シ

陛下英明ノ資、希クハ速ニ戎機ヲ息メ速ニ和局ヲ開キ双方
元老重望ノ士ヲ派シテ誠意難ヲ排シ以テ紛糾解決ノ任ニ当
ランメラレムコトヲ謹ンテ微忱ヲ布シ併セテ
御康寧ヲ祝ス

民国二十一年八月二十二日

310 昭和7年9月15日

日本国満州国間議定書

議定書

日本国ハ満州国ガ其ノ住民ノ意思ニ基キテ自由ニ成立シ独
立ノ一国家ヲ成スニ至リタル事実ヲ確認シタルニ因リ

ノ要アラムヤ、如此ハ人ヲ損ヒ己ヲ利シ他人ノ不幸ヲ引
起スルノミニシテ兩國相和セス共存共榮ノ途ナカラシ
二、人口過多ノ理由ハ自ラ言フヘクシテ他人ノ責ニ非ス家
人多ク經濟足ラサルノ故ヲ以テ隣家ノ財ヲ強奪スルハ法
律ノ許ササル所況ヤ優生學ト生育節制ノ途アルオヤ日本
ハ今ヤ有主ノ満州ヲ侵シ陽ニ強佔ノ名ヲ避クルモ陰ニ朝
鮮ノ前轍ニ倣フ天下ノ人豈欺クヲ得ンヤ

三、満州ノ為犠牲ヲ払ヘリ云云ノ言亦理由ヲ成サス借問ス
日本ノ戦ヒシハ自衛生存ノ為平將又義ニ仗リ鄰邦ヲ救ハ
ントセシモノ乎、若シ後者ナリトセハ固ヨリ満州佔拠ノ
理ナシ若シ前者ナリトスルモ他人ノ物ヲ以テ勞力ノ代償
ト為スヲ得ス南滿一隅露人ノ既得權ヲ以テ限度トスヘ
シ、他人ノ婦女ヲ救助シ代償トシテ他人ノ婦女ヲ求ムノ
非理ナルカ如シ

四、共同以テ赤化ヲ防止ストノ理由ハ甚是ナリ然レ共中国
自ラ人アリ之ヲ防止シツツアルニ対シテハ宜シク之ト協
同スヘキナリ名ヲ之ニ藉リテ其ノ領土ニ割拠スルノ理ナ
シ黃種相争フハ徒ラニ赤白帝國主義ノ為機會ヲ与フルニ
過キス況ンヤ九月十八日以前事未タ決裂ニ至ラス一介ノ

満州国ハ中華民國ノ有スル國際約定ハ満州国ニ適用シ得ベ
キ限り之ヲ尊重スベキコトヲ宣言セルニ因リ

日本国政府及満州国政府ハ日滿兩國間ノ善隣ノ關係ヲ永遠
ニ鞏固ニシ互ニ其ノ領土權ヲ尊重シ東洋ノ平和ヲ確保セン
ガ為左ノ如ク協定セリ

一 満州国ハ将来日滿兩國間ニ別段ノ約定ヲ締結セザル限
リ満州国領域内ニ於テ日本国又ハ日本国臣民ガ從來ノ日
支間ノ条約、協定其ノ他ノ取極及公私ノ契約ニ依リ有ス
ル一切ノ權利利益ヲ確認尊重スベシ

二 日本国及満州国ハ締約国ノ一方ノ領土及治安ニ対スル
一切ノ脅威ハ同時ニ締約国ノ他方ノ安寧及存立ニ対スル
脅威タルノ事実ヲ確認シ兩國共同シテ国家ノ防衛ニ当ル
ベキコトヲ約ス之ガ為所要ノ日本国軍ハ満州国内ニ駐屯
スルモノトス

本議定書ハ署名ノ日ヨリ効力ヲ生ズベシ

本議定書ハ日本文及漢文ヲ以テ各二通ヲ作成ス日本文本文
ト漢文本文トノ間ニ解釈ヲ異ニスルトキハ日本文本文ニ拠
ルモノトス

右証拠トシテ下名ハ各本国政府ヨリ正当ノ委任ヲ受ケ本議

事項2 満州国の成立と日本の承認

定書ニ署名調印セリ
昭和七年九月十五日即チ大同元年九月十五日新京ニ於テ之ヲ作成ス

日本帝国特命全權大使 武藤 信義
満州国 國務総理 鄭 孝 胥

因日本国確認満州国根拠其住民之意思自由成立而成一独立国家之事実
因満州国宣言中華民國所有之國際約款其応得適用於満州国者為限即應尊重之

満州国政府及日本国政府為永遠鞏固満日両国間善隣之關係互相尊重其領土權且確保東亜之和平起見為協定如左

一 満州国將來満日両国間未另訂約款之前在満州国領域内

日本国或日本国臣民依拠既存之日中両方間之條約協定其他約款及公私契約所有之一切權利利益即應確認尊重之

二 満州国及日本国確認對於締約国一方之領土及治安之一切脅威同時亦為對於締約国他方之安寧及存立之脅威相約兩國協同當防衛国家之任為此所要之日本国軍駐紮於満州国内

本議定書自簽訂之日起即生效力

日本帝国特命全權大使武藤

鄭 孝 胥

大同元年九月十五日

計 開

一 大同元年三月十日満州国執政致本庄関東軍司令官函及昭和七年五月十二日該司令官致該執政覆函

二 大同元年八月七日鄭國務総理与本庄関東軍司令官所訂關於満州国政府之鐵路港湾水路航空路等之管理並鐵路之築造管理協約及本於以上協約之付屬協定

三 大同元年八月七日鄭國務総理与本庄関東軍司令官所訂關於設立航空会社之協定

四 大同元年九月九日鄭國務総理与武藤関東軍司令官所訂關於設定国防上必要之鈷業權之協定

以書翰啓上致候陳者本日付貴翰ヲ以テ今般日本国政府ニ於テハ満州国ガ独立ノ一国家ヲ成スニ至リタル事実ヲ確認セラレ且兩國間ノ善隣ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ニシ互ニ其ノ領土權ヲ尊重シ東洋ノ平和ヲ確保スル為必要ナル協定ヲ締結スルコトニ御同意相成候処右以前ニ於テ既ニ日本国関東軍司令官ト満州国執政又ハ國務総理トノ間ニ交換又ハ締結セラ

本議定書繕成漢文日本文各二份漢文原文与日本文原文之間如遇解釈不同之処以日本文原文為準

為此記名兩員各奉本国政府之正当委任將本議定書簽字蓋印以昭信守

大同元年九月十五日 訂於新京
昭和七年九月十五日

満州国 國務総理 鄭 孝 胥
日本帝国特命全權大使 武藤 信義

往復文書

満州国國務総理鄭

為

照会事此次

貴国政府確認敝国成一独立国家之事実且同意為永遠鞏固兩國善隣之關係互相尊重其領土權確保東亜之和平起見訂結必要之協定在案查其以前貴国関東軍司令官与敝国執政或國務総理之間業已所交換或締訂之左開文書及約款均因符合上述宗旨敝国政府茲確認之而為繼續有效相心照請 貴大使查照為荷須至照会者

右 照 会

レタル左記文書及取極ハ何レモ前記ノ趣旨ニ合致スルモノナルニ付満州国政府ハ此ノ際之ヲ確認シ引続キ効力ヲ有セシムルコト致シタル旨御照会ノ趣了承致候

右回答得貴意候 敬具

昭和七年九月十五日

日本帝国特命全權大使 武藤 信義

満州国國務総理 鄭 孝 胥

記

一 大同元年三月十日満州国執政ヨリ本庄関東軍司令官宛書翰及昭和七年五月十二日同司令官ヨリ同執政宛回答文

二 大同元年八月七日鄭國務総理ト本庄関東軍司令官トノ間ノ満州国政府ノ鉄道、港湾、水路、航空路等ノ管理並ニ線路ノ敷設、管理ニ関スル協約及右協約ニ基ク付屬協定

三 大同元年八月七日鄭國務総理ト本庄関東軍司令官トノ間ノ航空会社ノ設立ニ関スル協定

四 大同元年九月九日鄭國務総理ト武藤関東軍司令官トノ間ノ国防上必要ナル鈷業權ノ設定ニ関スル協定